

矢作弘『都市危機のアメリカ』を読む

本書では「ポストコロナの時代」を念頭に置きながら、21世紀を迎えて以降のアメリカが直面する「都市危機」を考える。

新聞記者として30年余働いた筆者らしいタッチで書かれていて、多くの事実とその意味解釈を知ることができる。副題「凋落と再生の現場を歩く」のように、ニューヨークをはじめとして、あたかもアメリカの都市を探索しているように感じる。「ジェントリフィケーションの激化」「GAFに代表される情報通信ハイテク産業の急成長」「ラストベルトの旧煤煙型都市の復活」、そして「郊外の変容」を切り口に、転換点に差しかかったアメリカの都市／社会を考えるもので、アメリカ都市史を知るのに役に立つ。



本書では、「スーパースター都市の光と影—そして「影」が濃くなる」「ラストベルト都市がブーミング都市（人気上昇の町）になる」「郊外がリベラル化する」等々、いくつかの仮説を提起し、データと事例をもとに検証。目次のように、大きく3つのパート、6章から構成されている。

I 変容する「スーパースター都市の「かたち」

- 1章 創造階級／創造都市が未曾有の格差社会を生む—「アマゾン騒動」と都市社会運動の台頭
- 2章 21世紀都市の「物の怪」、その正体を探る—ジェントリフィケーションの現場を歩く

II 変容する「ラストベルト都市の「かたち」

- 3章 「格差社会の震源」コネチカットを歩く—ある工業都市が貧困都市に転落した構図を読む
- 4章 ネクロポリスから「甦るラストベルト都市」—歴史的遺産を活かす

III 変容する「郊外都市の「かたち」

- 5章 ショッピングセンター葬送の鐘が鳴る—郊外の「変容」とアメリカ例外主義の衰亡
- 6章 「郊外学」が求められる時代—貧困、多様性、リベラリズム、「もう1つの郊外」

一読して印象に残ったのは、パート1のスーパースター都市、変容するニューヨークの「かたち」である。いびつなアマゾンの誘致合戦と挫折、グーグルの「よき市民」としての進出戦略など、まさにニューヨークの陣である。情報通信ハイテク企業が都市改造の主役に躍り出た。GAF、及びそこで高給を稼ぐ管理職／専門家集団は、R・フロリダが提唱した創造都市時代のチャンピオンである。しかし、その過密化する集積は、不平等と都市の分断を増殖させる。最近では、GAFの対抗軸で都市社会運動が躍動し、都市政治の舞台で変革の要求を突き付けるようになった。この新しい都市危機に直面し、フロリダは「転向」を余儀なくされた。

紹介したいことは多い。京都研究会で本書を報告するので、またレポートしよう。

(2021年3月6日)